

幼児期における平和教育(1)

莊 司 雅 子

アメリカのコロンビア大学に事務局をもつWCCCI(世界カリキュラム指導協会)の主催で、昨年九月八日から十八日まで、イギリスのキール大学で世界教育会議(World Conference on Education)が開かれた。私はアジア地域を代表し、運営委員の一人として、また幼児教育部会の司会者として出席を要請された。WCCCIというのは世界的な規模で共通の教育方法やカリキュラムを考えていこうという主旨で発足した世界教育協会である。この度の会議の主題は、「平和のための教育」Education for peaceであった。三〇数カ国から約三〇〇名の教育学者・教育心理学者・教育社会学者・教育実践家及び教育行政家たちが参加され、世界平和のための教育について討議した。十日間の会議中、一日の学校訪問と一日の観光以外は、毎日朝九時から夜十時まで、全体会議と各部会のスケジュールがぎっしり組まれ、参加者一同息づく間もないぐらいであった。全体会議は主として平和のための教育というテーマの基調になる講演やパネルディスカッションで、それは

会期中四回行われた。その他の時間はほとんど各部会にわかれての討議に費された。部会は、幼児教育(就学前教育)・小学校教育・中等教育・大学教育及び成人教育・校外教育の五つであった。参加者は全部各自の希望のグループに所属して、平和教育のプログラムと資料、カリキュラムに関する評価と研究及びそれを実施するための基礎理論などについて討議した。私は幼児教育部会の運営の責任者として、いかにこの討議をすすめればよいかについて、あらかじめ考えた。幼児部会のメンバーはフィリピン、ナイジェリア、ノールウェイ、西ドイツ、メキシコそしてアメリカなどの大学の幼児教育担当者や教育行政家であった。平和のための教育は、まず幼児期からという共通のイデーをもって参加された方々ばかりである。しかし、現実ではどの国もまだそうした視点でプログラムや指導などを計画してはいない。そこで私はまずこれらを討議していく基本資料といったものを用意して、幼児部会のメンバーに配った。たとえば一九七二年にパリのユネスコ

本部から出版されている『学校の生涯教育』の「就学前教育と初等教育」の章と、「〇歳から三歳児」(“Pre-school and elementary school”, “Infancy to three years of Age”, The School and Continuing Education, UNESCO, Paris 1972) に出ているフロイド心理学者が強調していることをあげた。すなわち人間の幼児期には、先天的に備わっている闘争本能があること、そしてこれが後年の精神的な健康面や物事に適応しようとする努力を妨げるものであるといっている。またピアジェが指摘している幼児期の経験のもつ重要性なども同書にのっているのである。また教育社会学者ハヴィガーストの著作『人間の発達課題と教育』に出ている幼児期の発達課題なども資料として出した。更にベスタロッチやフレーザーらの教育学者の著作にある幼児教育論、現代のアメリカの幼児教育者の研究による幼児期にあらわれている差別、人間関係への関心などに関する資料を幼児教育部会の参加者に配り、幼児期の平和教育を考える基本資料にした。

平和教育は、今や世界的な問題になっているが、この問題はまず幼児期に始めなければならないことが、心理学者や社会学者によって強調されている。しかしこれは考えてみると、既にスイスの大教育者であるベスタロッチが、「ゲルトルトはいかにしてその子を教えるか」という書物の第一三信に平和の心の芽生え

は、母の影響に始まると次のように書いている。

“わたしは自分に尋ねる。どうしてわたしは人間を愛し、人間に感謝し、人間に従順になるのか——人間に対する愛、人間に対する感謝、人間に対する信頼の根底になくはならない感情および人間らしい従順を育くむ能力は、どうしてわたしの本性のなかにあらわれてくるのかと。そしてわたしは、それらが主として、幼児と母との関係から生じてくることを知る。

母は子どもを育くみ、養い、守り、そして喜ばせずにはおれない。母はそうして子どもの要求を満たし、子どもにとって不快なものを遠ざけ、何もすることのできない子どもを助ける。子どもは啼まれ、喜び、愛の芽は、子どもの心の中に成長する。子どもはまだ見たこともないものが、子どもの目の前にあらわれると、子どもは驚き、恐れ、泣く。母が子どもをしつかり胸に抱き、子どもと戯れ、気を晴れさせると、子どもは泣きやむ。けれども子どもの目はなおいつまでも涙でぬれている。またおなじものがあらわれる。——母はまたもや子どもをかばって抱いてやり、もう一度子どもに向かって微笑む。子どもはもう泣かない。子どもは明るい目で母の微笑に報いる。——信頼の芽は、子ども、心の中に成長する。子どもが要求するたびに、母はその揺りかごに急いでゆく。飢しいときにはそこへ行き、渴いたときには飲ませてやる。

母の足音を聞けば、子どもは静かになり、母を見れば、手を差し延ばす。母の胸に抱かれて、子どもの目は輝き、子どもは満足する。母ということと満足ということとは、子どもにとつてまったく同じと考えられる。——子どもは感謝する。

愛情と信頼と感謝との芽はたちまち広がる。子どもは母の足音を知り、母の影に微笑み、母に似た者を愛する、母に似た者は彼にはよいものだ。子どもは母の姿に向かって微笑み、人間の姿に向かって微笑む。母が愛する者は子どももまた愛する。母が胸に抱く者は彼もまた抱く。母が接吻する者には彼もまた接吻する。

人間、愛の芽・同胞愛の芽は、子どもの中に成長する。(長田新編「ペスタロッチ全集」第八巻)

ペスタロッチに次いで、幼稚園の創立者であるフリードリヒ・フレーベルは、一八四四年に『母の歌と愛撫の歌』(Mutter und Kose = liden)をあらわし、世の母親や幼児教育者に、歌や遊戯を通して子どもに平和の心、愛の心、感謝の心、信頼の心を育てなければならぬことを教えている。その一節に次のようなものがある。

坊やいたしましょう

お菓子を焼きましょう

びちゃびちゃお菓子をたいらにしよう

パン屋さんがいってる。さあよろしい

すぐにお菓子を持つといで

急がにゃかまどが冷えますぞ

パン屋さん、上等のお菓子です

小さい坊やに焼いてください

すぐにお菓子を焼きましょう

かまどの奥へ入れますよ

フレーベルは、この遊戯をするとき、子どもにただ歌わせたり踊らせたりするだけではなくて、母なり教師なりが、神と自然と人間とのつながりを自覚しながら子どもと遊戯をすると、知らず知らずの間に子どもに愛の心、感謝の心、信頼の心をはぐくむことができるといっている。子どもはパンや菓子が好きであるから、母はそれを子どもにあたえたい。そのパンを題材とする遊戯を通して、子どもは神と人と物とのつながりを知り、そこに愛と感謝の心をはぐくまれる。

さてパンは子どもが母の手からうけ取る前に、まず焼かれなければならぬ。そこで町のパン屋が母の愛と子どもの望みとを媒介するということを、この遊戯で母は子どもに知らせることができ。そしてパン屋がパンを焼くには粉屋が粉を挽かなければならず、粉屋が粉を挽くには農夫が小麦を持ってこなければならぬ

い。さらにまた田畑に小麦が実らなければ農夫は小麦を持って行くことができない。田畑に小麦が実るには自然がよく調和して働いてくれなければならない。自然が調和して働くことのできるのは、神の愛が力をあたえ材料をあたえ、すべてのものをその目標へと導かなければならない。こうしてフレーベルは、われわれは「パン焼き」の遊戯を通してすべてのものは調和のとれた一つの大きな共同体であるということを知らず知らずの間に子どもに感得させることができるという。このようにして子どもはしだいに人を愛し、神を愛し、人に感謝し、神に感謝することを覚え、やがては平和のたいせつさを知る。

この歌と遊戯だけではなくて、この書のすべての絵や歌や遊戯は同じように幼児の心を育てるためのものである。たとえば「オオカミとイノシシ」というただけしい動物の絵と歌の場面でも、フレーベルは親や教師に、動物の生活のあり方と人間の生活のあり方を教えなければならぬと述べている。人間のうちでも時にはこのような猛獣と同じように野卑な欲望がはげしくあらわれるが、それは幼児のやさしい心に強烈な印象をあたえるので、よく教えておかなければならない。だから幼児の神経や想像力が強い刺激を受けすぎるときは、できるだけ幼児の幻想を純粹なままに、幼児の羞恥心を傷つけないようにすることがたいせつであ

る。とかく、大人の不注意な言葉によって幼児の眠っている誤解をよびますことがある。幼児といえども動物は人間よりも知識が劣っているということを知ることができる。人間は自分の行為を知り、また知るべきである。子どもといえどもそれを知るべきである。以上のようなことをフレーベルは述べながら親や教師は子どもが動物の世界にもただけしいのがあるが、やさしいのもある。植物の世界などはたいいて健康で、快活な生活をし、それぞれの働きをしているから、私たち人間はそれをやたらに妨げないときとしたり、まして人間はお互いに仲よくそして自分々々の天職と使命に忠実に生活しなければならないことを子どもに教えるなければならないと述べている。

このように、フレーベルはたとえ、特に平和のための教育を幼稚園教育に直接述べていないとはいえ、平和教育の基本的な概念を、彼の書物に、また彼が創作した方法―たとえば、遊戯・歌・物語、教育玩具（恩物）の中に見いだすことができる。二〇世紀の今日において幼児期における平和教育を考える時、私たちは、フレーベルの幼児教育に関する思想と方法を抜きにしては考えられないと思う。